

J カフェ

～～ JAUW ヒューマンリソース活用プログラム ～～

JAUWが誇る最大のタカラは、会員のもてるチカラです。

ここには、豊かな経験、広い知識、深い洞察があります。
一緒に、新しい世界を発見、創出、共有しませんか。

第1回 中国あれこれ

日 時：2018年9月19日（水）午後1:30～3:30

場 所：本部事務所

講 師：江原孔江 理事

内 容：中国の大連、北京、上海で長年生活された経験から、異文化コミュニケーションのポイント、肌で感じた生活実感など、お話いただきます。

募集人数：20名

参加費：1,000円（茶菓含む）

申 込：本部事務所

Tel：03-3358-2882 / Fax：03-3358-2889

締 切：9月15日ごろまで

★生涯学習委員会では、JAUWの人材を活かす活動を企画中★

・「災害を語る」シリーズ化：

ジェンダーの視点から、災害に関する経験や提言を収集

・Jカフェ：

「あの人にあの話を聞きたい」（経験談、趣味の紹介、専門知識など）

・先輩女子とのキャリアトーク：

大学生、再就職・転職希望者をサポートするための、キャリア経験を活かしたメンターカフェ

★他薦・自薦大歓迎！ ご協力よろしくお願いたします。

J カフェ通信 1号

～ JAUW ヒューマンリソース活用プログラム ～
大学女性協会 生涯学習委員会 2018.9.30 発行

第1回 中国あれこれ (講師：江原孔江 理事)

日時・場所：2018年9月19日(水)午後1:30～3:30 本部事務所 会議室

参加人数：27名

中国あれこれ

江原孔江

「初出勤する前までに『上海時代』を読んできてください。」

財団法人国際文化会館田辺龍郎常務理事のお言葉でした。津田塾大学学芸学部英文科を卒業しアイハウスという名前で親しまれている財団法人国際文化会館 (International House of Japan) の企画部に採用となった際、打ち合わせが終了して帰宅しかけた私の背中にかけてられたお言葉でした。

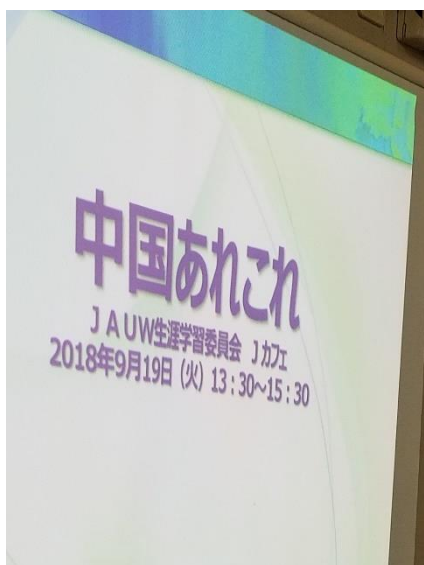
英文科ではアメリカ研究を専門として選択した私にとって、国際文化会館理事長の松本重治先生は卒業論文を書く際に最もお世話になった「原典アメリカ史」の編さんをされた偉い先生、としか存じ上げず、「上海時代」というご本とは一体なんのこたなのだろう、と思ったものでした。

3月の卒業式を待たず初出勤が始まり、企画部員兼理事長秘書というお役目を仰せつかった私にとって、松本先生が中国と深い関わりをお持ちになる方だということを初めて知った時でした。

当時の私にとっては、中国が中華人民共和国であることぐらいしか知らず、日中の歴史についても遣隋使や遣唐使ぐらいしか頭になかった私は、その後、先生の面会アポイントメントをアレンジするお役目が始まって、次々と内外の多くの“歴史の生き証人”のような方々にお目にかかる機会を得ていきました。

そんな中、当時JETROの招聘で来日した文化人の受入担当をしていた江原氏と出会い結婚。アメリカに向いていた私のベクトルは一挙に180度転換。背中を向けていた中国に向くようになりました。

江原氏がJETRO大連事務所立ち上げのために大連に駐在することになったのが1993年。以後6年半ほど大連で暮らすことになりました。中国語がまったくわからなかった私は四十の手習いとばかり、大連到着後2日目に大連外国語大学漢語センターに入学することになりました。というのも、中国語がわからないと毎日の暮らし、特に生鮮市場での食材の買い物もできないからなのです。英語を知っている人はホテル勤務の人々だけで、一般



の人々の間では英語はまったく通じません。学校で習った中国語を早速使ってみた人は、帰りの坂道の途中にある市場の野菜売りのオバサンでした。「多少錢」という「おいくらですか」が、何度言っても通じないのです。そこで、他の人々がどのように会話をしているのか聞くと「ザンマイダ」と言っているのです。はて、どんな意味なのか。翌日先生にそのことを話すとそれは「怎么卖」という言葉で、どのように売りますか、という意味だとのことでした。一般の人々が使う言葉は教科書には出てこないということが分かった瞬間でした。このようにして教室で習う中国語と実践中国語の両刀使いをしながら、徐々にコミュニケーションができるようになり、日常生活が始まりました。

大連では市場の売り子さんたちだけでなく、実に多様な人々と出会うことができました。というのは、夫がJETROで日本商工倶楽部の事務局をしていたため、広報誌を作ることになり、その作成ボランティアをはじめたからなのです。そのおかげで、大連で活躍する女性たちへのインタビューをシリーズで掲載することになり、次々といろいろな女性たちにインタビューをする機会がありました。当時は改革開放真っ盛りの時代で、女性起業家も次々と実力を発揮。大連版「おしん」やモデル、フライトアテンダント、女性アナウンサー、行政職員等、つぎつぎと面会し、彼女たちの仕事や人生観を語っていただき、中国の女性たちのダイナミズムに触れることができました。中国女性たちだけでなく、当時88歳だった中国残留婦人へのインタビューは、日本という国について深く考えさせられる体験をさせていただきました。また、女性たちだけでなく、日本と中国の子供たちの友好交流活動をしている「旅順児童教育後援会」の川畑文憲会長と1998年に大連で出会うことになり、それもまた、大連に住んだおかげだと思っています。このときから後援会の活動のお手伝いをするようになり以来20年、現在に至っています。



夫の仕事柄、中国側との宴会に出席する機会も多々ありました。宴会の席順やテーブルマナー、特に度重なる乾杯やスピーチの相互応酬のマナーなど、中国という13億人56民族が共存するための「言葉の文化」の奥深さに感動したのもこれらの経験のおかげです。

経験により理解したこととして「お土産文化」もあります。日本人も友人や知人、仕事関係で面会する際には“挨拶代わりにの手土産”は欠かせないコミュニケーションツールですが、中国では日本社会以上に大きな意味を持つことがわかりました。個人ベースでもお土産を何にするのかで頭を悩ませることが多いのですが、国家間のお土産には大きな意味があります。

2015年に習近平国家主席がフランスを訪問した際、フランスの儀仗兵が乗っていた馬が大変美しいと褒めたことがあったそうです。そのことを忘れなかったフランスは、2018年マクロン大統領が訪中した際に馬をお土産としたそうです。中国はそのお土産のセンスの良さに、「馬到成功（物事を始めれば直ちに成果を挙げる意）」という言葉があると諺を引用し大変な喜びを表現。中仏関係は大変順調に展開しているそうです。

さて、近年首脳同士の交流が途絶えていた日中関係ですが、2018年5月、公賓として初来日した李克強首相のお土産はトキのつがいでした。2010年の上海国際万国博覧会の日本政府



館はトキをテーマに日中友好交流の成果を高らかに謳い上げたのは記憶に新しいことでしょう。日本と中国がともに手を取り合い協力して保護・繁殖活動をし、発展させている絶滅に瀕しているトキ。そのトキを初来日のお土産に託したメッセージはまさに瀕死の日中交流の現状に対するさらなる活発化への祈り、だったのでしょうか。このメッセージに対し、10月の安部首相訪中時には、一体何をお土産とするのでしょうか。

中国の人々と交流を重ねると、コミュニケーションが「道理」に適っているかどうか、が判断基準だということがわかります。「以心伝心」の日本文化とは大いに異なり、言葉を尽くした説明が道理に合うかどうかということも、大連、北京、上海の3都市に暮らしたからこそ分かったことでした。

私にとって津田塾大学はアメリカ研究者佐々木みよ子先生との出会いでした。アメリカ文化コースのゼミの時間に先生から語りかけられた数々のメッセージ。そのうちのひとつに「homo-geneous と hetero-geneous」の話があります。居心地のよい同種・同質の仲間とだけ一緒にいてはいけません。常に異種・異質を求めなさい。佐々木先生のこのお言葉がずっしりと胸に残り、若かりし私にとっては「ヘトロの中国」に関心が及んだのでした。

中国と出会わなかったら、柔軟な思考や異文化理解を体験することがなかったことでしょう。知らなかったことを知る、ということは、尽きることのない学びの喜びに間違いありません。論語の最初の言葉である「學而時習之。不亦説乎。学びて時にこれを習う、またよろこばしからずや。」とは、まさにこのことなのでしょう。

【アンケートから】

- ・すばらしいお話をありがとうございました。あきることなく、眠くなることもなく、最後まで楽しく聞くことができました。江原さんの話術のすばらしさに感動しました。(Y. S.)
- ・メディアでは知ることのできない、しかも奥の深いお話をふんだんに伺うことができ、新たな視野が持てた気持です。旅行者ではなく、その地で生活された、しかも現地の多様な人々との交流をされた江原様ならではの貴重な体験がとても面白く楽しかったです。(R. N.)
- ・国交が始まってから後、招へい状を受けて訪問した頃から10数年続けていった頃のことを思い出しました。周恩来首相の頃、とても透明感のある空気でした。あの空気を中国人は知っているのでしょうか。(A. G.)
- ・非常に楽しかった!!(A. G.)
- ・中国の実体験を通したお話は大変興味深く、お話を通して伺った中国の生活は大変住みにくそうでしたが、その中でよくぞ立派に住み抜いて来られたものよと感服致しました。中国への関心が深まった気がします。
- ・自分では、欧米一辺倒の考え方であるとは思っていなかったが、今日のお話を聞いて、中国に関してはかなり無知であることが分かった。中国を連邦であると考えるとよいとの事で、これからは見方を変えようと思う。“誰が食べさせてくれるか”が中国の人たちの考え方の基本にあるというのは、どこの国でも共通にあると思った。(A. F.)
- ・「近くて遠い国」でいる中国を身近に感じた。中国7つの基礎知識をはじめとする「中国あれこれ」は江原講師の圧巻の話術とともに面白かった。(S. T.)
- ・大変面白く参考になりました。(C. S.)
- ・大変勉強になりました。隣国でありながら、知らないことが山積みでした。テーブルマナー、トキの意味等。

- ・しばらく振りでもとても楽しい一時を過ごすことが出来ました。中国を身近に感じられると思います。(E.M.)
- ・とても楽しくお話を聞かせていただきました。(S.M.)

【当日の様子】

江原孔江理事に「中国あれこれ」と題し、中国の大連、北京、上海で長年生活された経験から、多文化コミュニケーションのポイント、肌で感じた生活実感などをお話いただきました。

はじめに全員に渡されたミニテスト（中国の国土面積は日本の何倍？中国で人口の一番多い都市はどこ？など全7問。下記 参照）は、自分たちの持っている中国情報のあやふやさをまず思い知らされました。

夫君の赴任に同行なさり、現地で習いはじめ、初めてお買物で使った中国語の話、現地の人たちとのやりとりからわかった人間関係の日本とのギャップ感などの悪戦苦闘の日々をユーモアたっぷりに話し始められました。

日本では、なかなか聞く機会のない中国でのテーブルマナーの実態や、土産文化に象徴される真底のやり取りなど、メディア報道だけでは、理解しえない内容も大変わかりやすくお話いただきました。

また、ご自身も中国からの留学生の支援をなさっていらっしゃることもあり、平成29年度の日本への留学生数が、欧米の11,851人に対し、中国からは107,260人というデータをあげられて、もっと中国のことを知るために、中国からの留学生との交流を提案なさっていらっしゃいました。

江原講師の話術は大迫力で、大好評に終わりました。感謝致します。乞う！ご期待！！第二弾！！！！

(嶋田 君枝 記)

江原作成

中国あれこれ
JAWW生涯学習委員会 Jカフェ
2018年9月19日(火) 13:30~15:30

ミニテスト

1. 中国の国土面積は日本の何倍ですか。
2. 中国の人口はどのくらいですか。
3. 人口の一番多い都市はどこですか。
4. 中国の共通言語は何語ですか。
5. 中国に住む人々は何民族ですか。
6. 通貨の名称と最近の日本円との為替レートは？
7. 中国に在住している日本人はどのくらいですか。